

# ミンスクの藪の中

——ホロコースト加害者の語りが照らし出すこと——

田 野 大 輔

## 1 はじめに

1941年8月15日、親衛隊帝国指導者ハインリヒ・ヒムラーは占領下ソ連のミンスクにアインザッツグループBを訪問し、多数のユダヤ人を銃殺する現場に立ち会った。独ソ戦開戦の約2カ月後、絶滅収容所建設の約3カ月前という時期に行われたこの視察は、銃殺による処刑の残虐さと執行者への負担の大きさをヒムラーに認識させ、より効率的で負担の少ないガスによる殺戮への移行を促す転機となったと考えられている。

この視察が広く一般に知られるようになったのは、世界的な反響を呼んだ米国のテレビドラマ『ホロコースト』（1978年）で取り上げられたことが大きい。その有名なシーンでは、ヒムラーは現場を知らない「軟弱者」のイメージで描かれている。彼は複数の側近を引き連れて意気揚々と視察にやってきたものの、実際に処刑を目の当たりにすると、その残虐さに衝撃を受けて気分が悪くなってしまうのである。このシーンではさらに、ヒムラーのそうした反応が後のガス室の誕生につながっていったことも示唆されている。銃殺を視察して動揺した彼は、部下たちを集めて演説を行い、もっと効率的な殺害方法が必要だと説く。ドラマではその後、この演説を聞いた部下たちの手でガス室の開発が進められていく経緯が描かれている。

だがヒムラーははたして本当に、処刑を見て気分が悪くなったのだろうか。またそのときの衝撃が彼をして、銃殺に代わる殺害方法の導入を決意させたというのは事実なのか。歴史研究の立場からすると、このエピソードの信憑性には疑問の余地が大きい。テレビドラマ『ホロコースト』の描写がラウル・ヒルバーグの大著『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』（1961年）の記述に依拠していることは明らかだが、ヒルバーグが典拠としているのは銃殺に立ち会ったヒムラーの側近エーリヒ・フォン・デム・バッハ＝ツェレウスキの手記だけであり、その内容はいくつもの点で現場に居合わせた他の関係者の証言と食い違っているからであ

る<sup>1)</sup>。これらの証言を手がかりに真相に迫ろうとする試みは、次節で検討するように一部で行われているものの、ホロコースト研究者の間でさえ、いまなおヒルバーグの叙述に依拠した一面的なイメージが支配的である<sup>2)</sup>。

そこで本稿では、ヒムラーのミンスク視察をめぐる複数の関係者の証言やその他の史料を突き合わせることで、視察の現場で実際に何が起こったのかを検討し、ホロコーストの展開のなかでこの視察がもつ意義を示したい。その上で、ホロコースト研究におけるオーラルヒストリーの限界と、それを通じて拓かれる方法論上の可能性を提示してみたい。

## 2 ヒムラーのミンスク視察

——事件の概要と研究状況——

まず事件の概要を整理しておこう。1990年代後半に利用可能となったヒムラーの勤務日誌により、視察が行われたのは1941年8月15日と確定することができる。この日の日誌には次の記述がある。

「午前、ミンスク近郊でパルチザンとユダヤ人の処刑に立ち会う。捕虜一時収容所を視察。14時、レーニンハウスで昼食。15時、ミンスクのゲッターを通過。精神病院を視察。それに引き続き（親衛隊の経営する）農場を訪問。夕方頃にミンスクへ戻る。レーニンハウスで夕食と宿泊」<sup>3)</sup>。

この日の視察の様子は週間ニュース用と思われる約2分半の映像で見ることができるが、映像には処刑と精神病院の視察のシーンが収録されていないため、そこで起こったことは関係者の証言から推察するしかない<sup>4)</sup>。バッハ＝ツェレウスキの手記が詳細に記述しているのは、この処刑と精神病院の視察の様態である。他の関係者の証言はほぼ処刑にだけ言及しており、事件の象徴的な重要性をうかがわせる。

処刑はアインザッツコマンド8と警察予備大隊9と

いう2つの部隊によって行われたが、処刑に立ち会った指揮官以上の人物は、ハインリヒ・ヒムラー（親衛隊帝国指導者）、カール・ヴォルフ（親衛隊帝国指導者個人幕僚部長）、エーリヒ・フォン・DEM・バッハ＝ツェレウスキ（ロシア中部親衛隊・警察高級指導者）、アルトゥーア・ネーベ（アインザッツグルッペンB司令官・帝国刑事警察局長官）、オットー・ブラートフィッシュ（アインザッツコマンド8指揮官）らである。処刑の場所はミンスクの東郊約30kmのスメレヴィチまたはスミロヴィチと推定され、精神病院の場所はミンスクの北郊約6kmのノヴィンキにあった親衛隊経営の農場内と考えられる<sup>5)</sup>。

次に今日にいたる事件の研究状況を見ていく。この視察をはじめて一般に知らせたのは、上掲のバッハ＝ツェレウスキの手記である。この手記は終戦直後にユダヤ系新聞『アウフバウ』に掲載されたもので、バッハ＝ツェレウスキが米軍に提出した供述書の内容とほぼ一致している<sup>6)</sup>。ヒルバークがもっぱらそれに依拠して事件を叙述していることは上述の通りだが、ジェラルド・ライトリンガーなど1950年代から60年代初めの他の研究者も同様である<sup>7)</sup>。こうした状況が変化するのは60年代半ばである。この頃に行われたいくつかの戦争犯罪裁判では、バッハ＝ツェレウスキと同じく視察に参加したヴォルフ、銃殺部隊を率いた指揮官ブラートフィッシュ、その部隊で殺戮任務を遂行した一般隊員など、多数の関係者が事件について証言を行った。それらの内容は多くの点でバッハ＝ツェレウスキの手記と食い違っており、これによって事件を多角的に検証する可能性が拓かれたはずだったが、この時期の代表的な研究者であるハインツ・ヘーネは、新たに得られたヴォルフの証言を利用しながらも、従来とほとんど変わらない描写を行っている<sup>8)</sup>。

だが1980年代半ばにヨッヘン・フォン・ラングがヴォルフの証言に見られる矛盾を指摘したのに続き、90年代半ばにはフォルカー・リースが様々な関係者の証言を検証して事件の真相を問い直したことで、ヒルバークの叙述の信憑性が疑問視されはじめることになった<sup>9)</sup>。さらに90年代後半以降、ヒムラーの勤務日誌やアインザッツグルッペンBの報告書などの新史料が利用可能になると、事件前後のホロコーストの展開を詳細かつ多角的に検証した研究も登場するようになった<sup>10)</sup>。こうした研究の進展により、今日ではヒムラーの視察を決定的な転機とする見方は相対化されている。いいかえれば、この事件がユダヤ人殺戮の無差別化、さらにはガス殺への移行を促す転機——「ガス室誕生



図版1：ミンスクのヒムラー一行  
(1941年8月15日午前)

左からバッハ＝ツェレウスキ、ブラートフィッシュ、ヒムラー、グロートマン（ヒムラーの副官）、1人挟んでヴォルフ。フレンツ撮影。

出典：Hans Georg Hiller von Gaertringen (Hrsg.), *Das Auge des Dritten Reiches*, München 2006, S. 181.

の瞬間」——となったという見方は、必ずしも正しくないと考えられるようになったのである<sup>11)</sup>。

このような研究状況をふまえ、以下ではバッハ＝ツェレウスキの手記を他の関係者の証言と突き合わせながら、視察の現場で実際に何が起こったのか、それがどんな意義をもつのかを検証していきたい。紙幅の関係から裁判の審理内容については十分な説明を行うことはできないが、証言の検証にあたってはそれも考慮しながら信憑性の評価を行うことにする。その際にとくに問題とされる事件のポイントを時系列順に並べると、(1)前夜の会合、(2)殺害の対象、(3)処刑の方法、(4)ヒムラーの反応、(5)処刑後の演説、(6)精神病院への訪問ということになる。

### 3 ミンスクで何が起こったのか ——事件の検証——

#### (1) 前夜の会合

バッハ＝ツェレウスキの手記によれば、ヒムラーは前日にヴォルフらとともにミンスクを訪れ、同地を管轄するバッハ＝ツェレウスキ、スモレンスクから呼び出されたネーベと合流した。レーニンハウスでの夕食の席で、ヒムラーはネーベに何人の被拘束者がいるか尋ね、ネーベは100名程度の数を挙げた。ヒムラーはさらにこの被拘束者を翌朝処刑したら「特別な事態」が生じるか尋ね、一度そのような処刑を見ておきたいと語って、ヴォルフとバッハ＝ツェレウスキに同行を命じたという<sup>12)</sup>。

この一見それらしい記述は、次の2点で検証が必要

である。1点目は、ヒムラーに処刑視察のきっかけを与えたのが本当にネーベだったのかという点、2点目は、被拘束者がどう理由で処刑されることになったのかという点である。順に見ていこう。

1964年の裁判でのヴォルフの証言によれば、ヒムラーが処刑の予定を知ったのは翌朝の朝食の席で、それを伝えたのはネーベではなくバツハ＝ツェレウスキだった<sup>13)</sup>。ヴォルフ以外の複数の証言者も、前夜の会合にバツハ＝ツェレウスキが同席していたことを認める一方、ネーベの同席は不明だとしている<sup>14)</sup>。ただしヴォルフの証言は曖昧で、そのつど内容が変化している。1958年の尋問では、彼は処刑前夜の出来事に言及しておらず、バツハ＝ツェレウスキの同席だけを認めていた<sup>15)</sup>。だが62年の尋問では、ネーベが処刑前にヒムラーに現地の状況を説明した後、急遽処刑が行われることになったと述べ、バツハ＝ツェレウスキの同席は不明だと証言を変えている<sup>16)</sup>。さらにその後の予審では、彼は前夜の夕食に参加したかさえ覚えておらず、ネーベがヒムラーに翌日の処刑のことを報告したかどうか不明で、自分もヒムラーから直前になって知らされたと主張するなど、証言が二転三転している<sup>17)</sup>。

ネーベかバツハ＝ツェレウスキかを判断する上で考慮に入れる必要があるのは、ネーベが戦時中にすでに死亡していたという事実である<sup>18)</sup>。それをいいことに、バツハ＝ツェレウスキがネーベに責任を負わせようと考えたとしてもおかしくない。ミンスクを管轄していたのが誰だったのかを考慮すれば、ヒムラーに現地の状況や処刑の予定を報告したのはバツハ＝ツェレウスキだった可能性が高い。

それでは被拘束者が処刑された理由は何だったのか。バツハ＝ツェレウスキの手記にはその理由は記されていないが、1962年の証言によれば、ミンスクで親衛隊指導者が殺害される事件があり、ネーベがこれに関与した人物を逮捕し、処刑することを決めたのだという<sup>19)</sup>。ヴォルフも1964年の裁判でこの事件に言及しており、それに関与したパルチザンや地下活動家などが処刑されると認識していたと証言している<sup>20)</sup>。ヴォルフはまた62年の尋問で、ネーベがヒムラーに現地のパルチザンの状況を説明し、ユダヤ人をすぐれた情報網をもつ危険な存在、スパイとサボタージュの精神的首謀者と断定した上で、急遽100名から120名のパルチザンの処刑を決定したとも主張している<sup>21)</sup>。

これらの証言を特徴づけているのは、処刑をパルチザンやサボタージュ活動家に対する「報復措置」として正当化し、ユダヤ人絶滅政策の存在を否定しようと

する姿勢である<sup>22)</sup>。だがそうした説明は、処刑後の演説でヒムラーが「下等人種の根絶」を訴えたという後述するバツハ＝ツェレウスキの証言と矛盾している<sup>23)</sup>。次に見るように、殺害の対象がユダヤ人であり、処刑が絶滅政策の一環として行われたことは、現場に居合わせた関係者の多くには自明の事実だったのである。

## (2) 殺害の対象

バツハ＝ツェレウスキの手記によれば、処刑の犠牲者はパルチザンとその協力者で、3分の1から2分の1がユダヤ人であり、2名の女性も含まれていた<sup>24)</sup>。1962年の証言でも、バツハ＝ツェレウスキは犠牲者がユダヤ人だけではなかったことを強調している<sup>25)</sup>。そうした姿勢はヴォルフも同じで、58年の尋問では「ユダヤ人とパルチザン」が処刑の対象だったと証言するも、64年の裁判ではもっぱら「有罪となったパルチザン」が処刑されたと主張を変えている<sup>26)</sup>。ヴォルフによれば、殺害の対象はパルチザンや地下活動家で、処刑の必要性和合法性に疑問を抱くことはなかったし、ユダヤ人の殺害も計画的な絶滅が目的だったとは知らず、潜在的な敵の排除を目的とする軍事的な治安措置にすぎないと考えていたという<sup>27)</sup>。

だがこの2人を除くほとんどの証言者は、犠牲者の大半がユダヤ人で、その絶滅を目的に処刑が行われたことを認めている<sup>28)</sup>。警察予備大隊9の隊員パウル・ディンターは、「当時銃殺を体験した者がそこで犯罪者の軍事的処刑が行われていたと考えるなどというのは私には理解できない」と証言している<sup>29)</sup>。それどころか、幹部たちの間でユダヤ人の絶滅が話題にされていたという証言もある。ヒムラーの副官ヨーゼフ・キールマイヤーによれば、前夜の夕食の席でヒムラーが管轄地区のユダヤ人人口がどれくらいか尋ねると、バツハ＝ツェレウスキは現在「ユダヤ人作戦」が行われており、まもなくこの地区は「ユダヤ人のいない」場所になると答えた。そして、その任務がいかに厳しいものであるかは翌朝の処刑を見ればわかると進言したのを受けて、ヒムラーの視察が決まったという<sup>30)</sup>。1964年の判決も、処刑が純粋な「ユダヤ人作戦」の一環で、それをヴォルフも知っていたはずだと断定している<sup>31)</sup>。

ユダヤ人の銃殺がしばしばパルチザン対策を口実に行われたことはたしかだが、この時点ではまだミンスク周辺でパルチザンの活動が活発でなかったと多数の部隊隊員が証言している。彼らの認識では、処刑は「普通のユダヤ人作戦」だったのである<sup>32)</sup>。そこでは

現実的な危険よりも世界観上の「敵」との闘争が重要だった。ブラートフッシュは1958年の尋問で、ユダヤ人は部隊にとって危険ではなく、単に根絶の対象にすぎなかったと主張している<sup>33)</sup>。これらの証言から、ヒムラーの視察は単なるパルチザン対策ではなく、ユダヤ人殺害が順調に進んでいるかを報告するためのものだった可能性が高いと考えられる<sup>34)</sup>。処刑がミンスク郊外で秘密裏に執行されたことを考慮すると、それをパルチザン活動への報復措置と見るのは無理があるとの指摘もある<sup>35)</sup>。

ちなみに犠牲者の数は証言によってまちまちで、ヴォルフに対する1964年の裁判では100名から200名、ブラートフッシュに対する61年の裁判では少なくとも300名という数字が挙げられている<sup>36)</sup>。ディンターは120名から150名という数字を挙げ、40名程度ということはあると証言している<sup>37)</sup>。

### (3) 処刑の方法

バッハ＝ツェレウスキの手記によれば、処刑が行われたのはミンスク郊外の森の近くの草原であった。処刑は軍事的な精確さで実行され、犠牲者は落ちていて死へ赴いた。その際の印象的なエピソードに、銃殺を視察するヒムラーと銃口の前に立つ20歳前後の金髪碧眼のユダヤ人青年とのやりとりがある。「おまえはユダヤ人か」「はい」「お前の親は2人ともユダヤ人か」「はい」「ユダヤ人でない先祖はいないのか」「いません」「それではお前を助けられない」。一斉射撃が行われた後、2名の女性がまだ息をしていたため、ヒムラーは銃殺部隊の指揮官に「女性を苦しめるな、早く撃て！」と怒鳴りつけたという<sup>38)</sup>。

このおぞましい処刑の光景は、1964年の裁判でのヴォルフや部隊隊員の証言によってさらに詳細に描写することができる。犠牲者はミンスクの監獄から4台ほどのトラックで約30名ずつ連行され、処刑場から少し離れた場所で降ろされた後、約10名ずつ銃殺部隊の待機する処刑場に追い立てられた。処刑場には長さ10m、深さと幅2mの2つの溝が準備されており、犠牲者が溝に飛び込んで腹ばいになったところを、各10名からなる2組の銃殺部隊が溝の縁から射殺した<sup>39)</sup>。一斉射撃の後、息絶えていない者は親衛隊員に首筋や頭を撃たれて殺された。それが終わると部隊が交代し、次の犠牲者が連れてこられて、たったいま射殺された死体の上に横たわり、同じように銃殺された。これが午前中一杯、何度もくり返されたという<sup>40)</sup>。犠牲者は服を着たまま射殺された可能性が高く、所持品の押収

などは処刑場では行われていなかったようだ<sup>41)</sup>。

こうした処刑の方法からも、パルチザンや地下活動家への死刑執行でなかったことは明白である。ほとんどの証言が一致して認めているように、処刑場では名前も判決も命令も読み上げられることなく、無抵抗な犠牲者が容赦なく機械的に銃殺されただけだった。それは短時間で多数の人々をスムーズに殺害するためのもので、占領下ソ連で当時一般化していたユダヤ人大量殺戮の方法と変わらなかった<sup>42)</sup>。もっとも、銃殺部隊の隊員には相当な精神的負担だったらしい。彼らの多くは射殺に嫌悪感を覚え、夢中で銃を撃ったと証言している。「私はあまりにも深く動揺していたため、周りで何が起きているかを見ることもほとんどできなかった」<sup>43)</sup>。なかには任務に耐えられず離脱する者もいた。「私個人は処刑場と溝のなかの死体を見ただけでもうだめだった。心臓が喉から出そうで朦朧とした意識でしか周りを見ることができなかった。……そのような状態では銃を手にもって撃つこともできなかった」<sup>44)</sup>。同様の反応はミンスク以外でも報告されている<sup>45)</sup>。

現場にいた多数の関係者の証言を総合すると、金髪碧眼のユダヤ人青年、および2名の女性に触れているのはバッハ＝ツェレウスキだけで、そうした犠牲者の存在は疑わしいことがわかる。銃殺部隊の隊員は一律に犠牲者がもっぱら男性で、女性の殺害は見えていないと証言している<sup>46)</sup>。女性の犠牲者に言及したバッハ＝ツェレウスキの証言はむしろ、殺害対象が女性や子どもへと拡大し、無差別化しつつあった当時の状況を反映したものと見るべきかもしれない。この点についてはブラートフッシュも、自らの指揮する部隊がこの頃から女性と子どもも殺害しはじめたと証言している<sup>47)</sup>。

だがこのときの処刑が直接の転機となって無差別の殺害が一般化したと考えるのは、事件前後の状況から見ても無理がある。クリスティアン・ゲアラッハの研究によれば、アインザッツグループBの犠牲者数はこの後も約1カ月は一定で、しばらく男性の殺害が優先される状況が続いた。殺害の無差別化はむしろ各地でバラバラに進行し、アインザッツグループBの場合は9月後半になって犠牲者数が急増、12月までに少なくとも4万5000名が殺害された<sup>48)</sup>。ゲアラッハはさらに、ネーベが9月に3度にわたって帝国保安本部に「ユダヤ人知識人の絶滅」という最初の任務が完了したことを報告し、新たな任務を下すよう要請している事実にも注目している。これは他でもなく、ヒムラー

の視察の時点でユダヤ人絶滅を要求する総統命令が下されていた可能性が低いことを示している<sup>49</sup>。

#### (4) ヒムラーの反応

バツハ＝ツェレウスキの手記によれば、処刑を視察している間、「ヒムラーは極度に苛立ち、一時もじっとせず、目は泳ぎ、一斉射撃の瞬間はつねに地面を見ていた」。その様子を見たバツハ＝ツェレウスキは、ヒトラーに処刑の非道さを訴えた。「部隊の隊員の目をご覧下さい。どんなに深く彼らが動揺しているか！ この隊員たちは一生だめになってしまったんですよ。それでどんな部下を育成しようというのでしょうか？ 神経症患者か乱暴者のどちらかですよ！」。これを聞いたヒムラーは、目に見えて動揺したという<sup>50</sup>。ヴォルフもまた、ヒムラーが銃殺を見てひどく取り乱したと証言している。もっとも、彼がそうした反応に言及しはじめるのは1962年の証言からで、その内容もさらに劇的なものだった<sup>51</sup>。「この射殺の際、私とは違ってすぐ近くから成り行きを見ていたヒムラーのコートに、脳の一片が飛び散った。ヒムラーはそれで目に見えて気分が悪くなり、激しく嘔吐した」<sup>52</sup>。

だが複数の関係者の証言を突き合わせると、ヒムラーが本当に気分が悪くなったかどうかは疑わしいと考えられる。ヒムラーの動揺に言及しているのはバツハ＝ツェレウスキとヴォルフだけで、部隊隊員の証言にはそうした指摘はまったく見られない。それどころか、ブラートフィッシュははっきりとヒムラーがうろたえたことを否定している<sup>53</sup>。バツハ＝ツェレウスキ自身も1962年の証言で、「ヒムラーが泣いたとか嘔吐したとかといった見方は間違っている。彼はただ青ざめたにすぎない」と限定を加えている<sup>54</sup>。これらの証言から、少なくともヴォルフのいうような激しい動揺はなかったと考えるのが妥当である。そもそも、ヒムラーはこのときはじめて銃殺を視察したわけではなく、それは彼にとって日常的な光景にすぎなかった<sup>55</sup>。ヴォルフはヒムラーが衝撃を受けた理由として、戦場経験のない彼にそれまで銃殺を見る機会がなかったことを挙げているが、これは事実と反している<sup>56</sup>。銃殺の際に脳の一片がコートや顔にかかるというのも、物理的にありえないという指摘もある<sup>57</sup>。

バツハ＝ツェレウスキとヴォルフがヒムラーの動揺に言及したのはむしろ、処刑がいかに残酷でおぞましいものだったか、自分がそれにどれだけ嫌悪感を抱いていたかを強調するためだったと見るべきだろう。そこにはまた、ヒムラーに翻意をもとめる気持ちもあっ

たかもしれない。ブラートフィッシュの証言によれば、コートにかかった血を部下に拭かせているヒムラーを見て、ヴォルフは「自分が何を要求しているかわかってくればいいのだが」とつぶやいたという<sup>58</sup>。苛酷な殺戮任務を強いられ、激しい抵抗を覚えていた現場の関係者の胸には、殺戮を命じるヒムラーも同じ苦痛を味わって、負担の大きさを認識してほしいという思いが生じてもおかしくない。こうした気持ちに込めるかのように、ヒムラーはたびたび殺戮に従事する部下たちの精神衛生に懸念を表明し、各地の部隊を視察して士気を鼓舞する演説を行っている<sup>59</sup>。後述する処刑後の演説も、困難な任務に従事する隊員たちを激励する内容である。

銃殺部隊の一般隊員のなかには、ヒムラーのまったく異なった反応を指摘する者もいる。現場で射撃命令を下していたディンターによれば、ヒムラーは一斉射撃の後に溝のなかを覗き込み、まだ生きている者にとどめを刺すよう命じた。「ヒムラーはその際、私の隣に立ったままだった。他の部下たちは興味深げに、ヒムラーの後に立って見物していた。……ヒムラーとその部下たちにとって、すべてはまさに見世物だった」<sup>60</sup>。複数の隊員の証言からは殺戮を面白半分に見物する幹部たちへの反発がうかがわれるが、現場の状況からして彼らがそのような感情を抱くのも当然だった。なぜなら、このときの処刑は実際に一種の「ショー」として行われたものだったからである<sup>61</sup>。

ゲアラッハの研究が明らかにしているように、ヒムラーのミンスク視察には報道カメラマンのヴァルター・フレンツが同行していた<sup>62</sup>。処刑を撮影した写真や映像は見つかっていないが、同行カメラマンによる撮影が行われていたことは複数の関係者が認めている<sup>63</sup>。いくつかの状況証拠から、フレンツの派遣はユダヤ人殺害の進行状況を確認しようとしたヒトラー本人の意向によるものだったと推定される<sup>64</sup>。ヒムラーの視察前、1941年8月1日にゲシュタポ長官ハインリヒ・ミュラーは東部戦線でのアインザッツグルッペン活動を示す「視覚教材」の提供を要請する指令を出しているし、視察の約3カ月後、41年11月19日のヒムラーの勤務日記には総統本営で「週刊ニュースとミンスクの映像」を鑑賞したとの記述もある<sup>65</sup>。

#### (5) 処刑後の演説

バツハ＝ツェレウスキの手記によれば、ヒムラーは処刑が終わった後、銃殺部隊を集めて短い演説を行った。そのなかで彼は、この「血なまぐさい仕事」は不

快だが必要な任務であり、無条件に遂行されるべきものであること、彼自身も任務遂行の必要性を深く確信して行動しており、自分だけが「神と総統」の前ですべての責任を負うこと、動物や植物の世界にもいたるところに闘争があり、「害虫」から身を守るのは当然の権利であることを強調した<sup>66)</sup>。ヴォルフが証言する演説の内容も要点はほぼ同じである。ヒムラーは演説のなかで、この困難な任務はドイツ民族を守るために容赦なく遂行されなければならない、自分とヒトラーが歴史の前で責任を引き受けると主張、ユダヤ人への厳しい措置の必要性を強調したという<sup>67)</sup>。

バッハ＝ツェレウスキとヴォルフの間に大きな食い違いはないように見えるが、演説の内容は次の2点で検証が必要である。1点目は、ヒムラーがユダヤ人の無差別の殺害を命令したのかという点、2点目は、彼がそうした措置を指示する総統命令に言及したのかという点である。

この2点に関して、バッハ＝ツェレウスキの手記は曖昧な説明に終始している。だが少なくとも1点目については、手記のなかでヒムラーがダーウィン主義的な闘争の必要性を強調したことに言及しており、1962年の証言でも彼が「下等人種の根絶」を要求したと指摘していることから、処刑をユダヤ人絶滅政策の一環と理解していたと見ることができる<sup>68)</sup>。他方、ヴォルフの証言はさらに曖昧であてにならない。62年の証言で、彼はヒムラーがユダヤ人をボルシェヴィズムとパルチザン活動の首謀者と規定した上で、その危険からドイツ民族を守るための防衛措置として処刑を正当化したと供述しており、ユダヤ人絶滅政策や総統命令の存在に言及したかどうかは明言していない<sup>69)</sup>。その後の予審でも、ヒムラーはただ総体的にパルチザンやサボタージュ活動家の処刑のことを述べたにすぎず、ユダヤ人の殺害も合法的な死刑執行の枠内にあったと供述している<sup>70)</sup>。こうした主張が根拠に乏しいことは先述の通りである。

これに対して、銃殺部隊の隊員のほとんどはヒムラーが演説でユダヤ人絶滅の必要性を強調し、自分が責任を負うと確約したことを認めている<sup>71)</sup>。ただし彼がその際に女性と子どもも含めた無差別の殺害を命令したか、それを要求するヒトラー個人の命令に言及したかははっきりしない<sup>72)</sup>。だが少なくとも確実にいえるのは、この演説が隊員たちに自己正当化の根拠を与えたことである。彼らは残虐非道な犯罪行為に意に反して従事していると感じており、だからこそヒムラーが責任を負うと発言したことに安堵を覚えた<sup>73)</sup>。殺戮

任務を逆らえない命令と受け止めてしまえば、自責の念にかられずに済む。ブラートフィッシュもミンスクでヒムラーから総統命令の存在を聞かされ、命令に従う以外ないと悟ったと主張している<sup>74)</sup>。ヒムラー自身、そうした部下たちの葛藤を意識していたかもしれない。バッハ＝ツェレウスキの手記によると、彼の演説には次の一節があった。「ドイツ人が喜んでそんなことをしているとすれば、けっして望ましいことではない。だが諸君の良心が害されることはない。なぜなら、諸君はあらゆる命令を無条件に実行すべき兵士だからだ」<sup>75)</sup>。

#### (6) 精神病院への訪問

バッハ＝ツェレウスキの手記によれば、ヒムラー一行は処刑の視察に引き続き、ミンスク郊外の精神病院を訪問した。彼はそこでネーベに対して、精神障害者をできる限り早く「救済」するため、射殺よりも簡単で「人道的」な殺害方法を考えるよう指示した。ネーベはダイナマイトによる殺害を提案し、その方法を試してみる許可を得た。ずっと後になってバッハ＝ツェレウスキはネーベから、ダイナマイトによる実験は失敗に終わったが、いまやずっと「人道的」な手段が利用されていると聞かされた。当時すでにガス室に関する噂を耳にしていたことから、彼はネーベがその話をしているのだと理解したという<sup>76)</sup>。

精神病院訪問とガス室誕生との関連に言及しているのはバッハ＝ツェレウスキのこの記述だけで、彼自身も後の証言ではそれに触れておらず、ヴォルフも複数の証言を通じて一切沈黙を守っている。だがこの精神病院に勤務していた医師がヒムラーの訪問を証言しており、その模様を撮影したフレンツの写真も存在することから、訪問の事実そのものは間違いないと考えていいだろう<sup>77)</sup>。問題はそれがはたしてガス室を誕生させる直接のきっかけとなったのかどうかである。事件前後の状況からすると、この関連は大筋で裏付けられるように見える。ヒムラーが銃殺部隊の隊員の精神的負担を問題視し、より残酷でない殺害方法を必要としていたこと、そうした要請に応えるためにネーベ配下の犯罪技術研究所が爆殺とガス殺の実験を行い、移動式のガストラックを開発したことはたしかである。

だがガスを使った殺害はヒムラーの視察後にはじめて行われたわけではない。クリストファー・ブラウニングら複数の研究者が明らかにしているように、犯罪技術研究所はすでに1940年初めにはT4作戦（いわゆる「安楽死」作戦）と連携しつつ、化学者アルベル

ト・ヴィートマンのもとで一酸化炭素ガスを使った障害者の殺害を実施しており、さらにヘルベルト・ランゲの特別部隊もこの頃から同じ技術を使ったガストラックを運用して、東プロイセンやポンメルン、ポーランドの障害者の殺害を開始していた。ただしこの移動殺戮装置は輸送が困難な瓶詰めの一酸化炭素を使用していたため、占領下ソ連の掃討作戦に投入するには問題が多かった。そこで犯罪技術研究所は、排気ガスを車内に導入する新たなガストラックの開発に着手した<sup>78)</sup>。

1959年のヴィートマンの証言によれば、その経緯は次の通りである。ヒムラーの視察後、ネーベはヴィートマンと犯罪技術研究所のスタッフをミンスクに呼び、9月中旬にミンスクで爆薬、モギリョフで排気ガスを使った精神障害者の殺害を行かせた<sup>79)</sup>。関係者の証言によれば、この実験の目的は「銃殺部隊の負担軽減」に役立つ「人道的」な殺害方法の開発にあった<sup>80)</sup>。「ミンスクには不治の精神障害者がロシア人によって放置されており、その世話をすることはできない。……これらの精神障害者を爆薬で殺害してほしい。というも、精神障害者を1人ずつ射殺することを部下たちに要求することはできないからだ<sup>81)</sup>」。実験の結果、排気ガスを使った方法に分があることが判明し、ネーベはこれをヒムラーに報告した<sup>82)</sup>。それを受けて、帝国保安本部技術部のヴァルター・ラウフが犯罪技術研究所と連携しながら10月初めに新たなガストラックの開発に着手し、完成した車両を11月末から12月にかけて順次現場に投入した。12月初めにはクルムホフ(ヘウムノ)に拠点を移したランゲ特別部隊にも車両が配備され、ここに最初の絶滅収容所が稼働を開始することになった<sup>83)</sup>。

もっとも、いくつかの状況証拠から判断すると、ヒムラーは視察後すぐにネーベに実験を依頼しなかった可能性が高い。1990年代後半に発掘された英国の傍受電報は、バッハ＝ツェレウスキが視察直後の8月16日と18日にランゲ特別部隊を2度呼ぼうとしたものの、ランゲの多忙のために実現しなかったことを明らかにしている<sup>84)</sup>。この事実から、ヒムラーは最初ネーベではなくバッハ＝ツェレウスキに実験を依頼したのではないか、後者こそ実験を提案した張本人だったのではないかという推測も成り立つ<sup>85)</sup>。さらにまた、そもそもネーベが視察に同行していなかった可能性をうかがわせる証言も存在する。ヴォルフは1958年の証言でネーベが処刑現場にいたかどうかはわからないと述べているし、ブラートフィッシュも62年の証言で同様の



図版2：ミンスク近郊の精神病院を訪問するヒムラー一行

左からヴォルフ、ブラートフィッシュ、バッハ＝ツェレウスキ、ヒムラー。ロシア人通訳、勤務医と思われる人物も写っている。フレンツ撮影。

出典：Gaertringen (Hrsg.), *Das Auge des Dritten Reiches*, S. 182.

陳述を行っている<sup>86)</sup>。キールマイヤーはネーベの代わりにロシア北部親衛隊・警察高級指導者ハンス＝アドルフ・プリュッツマンの名を挙げている<sup>87)</sup>。この点で注目に値するのは、フレンツの写真のいずれにもネーベの姿が写っていないことである。ただしネーベの部下は彼がヒムラーの視察に加わるために出かけたこと証言しているし、ディンターも彼が現場にいたことを曖昧ながらも認めている<sup>88)</sup>。真相はなお藪の中だが、爆殺とガス殺の実験がネーベの指示のもとで実施されたことは確実にいえるとしても、新たな殺害方法の検討が当初はバッハ＝ツェレウスキの主導で進められていた可能性は高いと考えられる<sup>89)</sup>。

#### 4 おわりに

##### ——オーラルヒストリーの可能性——

以上、ヒムラーのミンスク視察に立ち会った複数の関係者の証言を突き合わせることで、現場で何が起こったのか、それがどんな意義をもつのかを検証してきた。これによって得られた知見を総括する前に、まずこの視察に関する様々な証言の限界を確認しておきたい。

ヒムラーのミンスク視察に関しては、この種の事件としては例外的に豊富な証言が存在する。それは1960年代の戦争犯罪裁判で審理の対象となり、多数の関係者への尋問が行われたからである。あらゆる刑事裁判がそうだが、犯罪への関与が認定されれば刑罰を受ける恐れがあるため、被告や証人の陳述が嘘や偽り、歪曲や誇張にみちたものになるのは当然である。そうした証言に頼って事件の真相に迫ろうとするのであれば、

各々の証言の信憑性を慎重に吟味する必要がある。それが困難な作業であることはたしかで、未解明のまま残される問題も多い。

多くの証言を突き合わせながら事件を検証していくと、バッハ＝ツェレウスキの手記の内容は大筋で裏付けられることがわかる。ただし彼は後の証言では処刑をパルチザン掃討作戦の一環として正当化し、しかもその責任をネーベに負わせている疑いがある。銃殺に代わる新たな殺害方法の開発も、当初は彼の手で進められていた可能性が高い。だがこれらの嘘や歪曲にもかかわらず、事件を叙述する筆致には本人が受けた衝撃の大きさがあらわれているように見える。事実、バッハ＝ツェレウスキは1942年1月に重度の胃腸障害を患って病院に運ばれたが、診察にあたった親衛隊の医師によれば、「彼はとくに自分が手を下したユダヤ人銃殺など、東方での凄惨な経験と結びついた幻影に取り憑かれている」とのことだった<sup>90)</sup>。彼にとっても、銃殺がきわめて大きな精神的負担となっていたことは疑いない。

これに対して、ヴォルフの証言は内容が二転三転していて、信頼に値するものとはいえない。彼の証言を特徴づけているのは、バッハ＝ツェレウスキと同様に、処刑をパルチザンへの報復措置として正当化し、ユダヤ人絶滅政策の存在を否定しようとする姿勢である。ヒムラーの反応に関して、証言の内容に一貫性が見られない。1964年の判決もヴォルフの証言の信憑性を疑問視し、次のように結論づけている。「被告（ヴォルフ）は陪審に対して、なぜ4回の異なる機会に同じ出来事について本質的な点で相反する4つの陳述を行ったのかを説明できなかった。またどの陳述を正しいものと認めようとしているのかという疑問にも、彼は答えなかった<sup>91)</sup>」。

こうした信憑性の不確かな証言に依拠せざるをえない点に、オーラルヒストリーの限界が存在する。ヒムラーの視察のような文書に残りにくい事件を検討する場合、それに関与した人物による口頭での証言に頼る必要があるが、とくに裁判で審理の対象となると証言の内容にバイアスがかかり、真相を究明する上での障害となることが多い。それどころか、証言の歪みや偏りが歴史修正主義の標的となって、ホロコースト否認に悪用される危険性もある。事実、英国の歴史学者デヴィッド・アーヴィングはバッハ＝ツェレウスキやヴォルフの証言を恣意的に引用することで、ヒトラーがユダヤ人絶滅政策について何も知らなかったという主張の根拠としている。もちろん、こうした主張は証

言の検証によってかなりの程度まで反駁することが可能である。バッハ＝ツェレウスキの手記にはヒムラーが処刑後の演説で自分とヒトラーが責任を負うと述べたとの記述があるし、ブラートフィッシュら複数の関係者も総統命令の存在を示唆する証言を行っている<sup>92)</sup>。悪用の危険性を防ぐためにも、証言の信憑性を慎重に吟味する必要があることはいうまでもない。

口頭での証言に依拠した歴史研究に弱点があるのはたしかだが、その種の記録を使って一日の出来事を深く掘り下げることで見えてくる問題もある。複数の関係者の証言を突き合わせることで、視察の具体的な状況、とくに処刑の目的や方法、ヒムラーの反応や演説の内容などについて、何が事実として確定できるのか、何が未解明のまま残されるのかが明確になるだけではない。そうした検証の作業によって、ホロコースト研究の重要な争点である絶滅政策の急進化のプロセス、とりわけ次の2つの転換に対するこの事件の影響もかなりの程度まで確認することができる。

1つ目は、銃殺からガス殺への転換である。ヒムラーの視察以前にガストラックが運用されていた事実をふまえると、この視察をガス殺への移行の直接の引き金と見るのは無理がある。だがそれは少なくとも、すでに存在していた殺害技術を改良して、占領下ソ連での掃討作戦に投入するきっかけになったとはいえる。ブラウニングが指摘するように、ガストラックは「最終解決」が本格始動するまでの「一時しのぎの手段」であり、この時点ではまだソヴィエト・ユダヤ人の排除という局地的問題を解決するためのものにすぎなかった<sup>93)</sup>。とはいえ、それは重要な一歩には違いなかった。そうした殺害技術の進化のプロセスにおいて、ヒムラーの視察は決定的な動因となった。視察後の関係者の動きも、彼がミンスクで現場の直面する技術的・心理的問題の深刻さを認識し、より効率的で負担の少ない殺害方法の導入を決意したことを示している。その意味で、このときの視察は現場からのフィードバックを活性化させ、政府中枢の政策を急進化させる触媒のごとき役割を果たしたといえるだろう。こうした知見は、ユダヤ人問題の「最終解決」がヒトラーの1回の命令で決定されたわけではなく、そのつど状況に応じて何度も軌道修正をくり返ししながら、漸進的に大量殺戮へ向かっていったという見方を補強するものである。

2つ目は、選択的な殺害から無差別の殺害への転換である。これについても、ヒムラーの視察は直接のきっかけとはいえない。ゲアラッハが指摘するように、



視察後もしばらくは犠牲者数が増加せず、男性の殺害が優先される状況が続いたからである<sup>94)</sup>。だがユダヤ人殺害の拡大という1941年後半の中期的な動向のなかで、このときの視察が重要な道標となっていることもたしかである。とくに注目されるのは、これを契機に精神障害者の効率的な殺害方法の検討が始まったことである。そうした「非生産的」な人間の殺害を目的に開発された技術が、ユダヤ人殺害の規模を飛躍的に拡大する可能性を開拓したことは間違いない。この間の動きを見てみると、ヒムラーの視察とほぼ同時期に帝国保安本部のアドルフ・アイヒマンがアウシュヴィッツ収容所を訪問し、所長のルドルフ・ヘスとユダヤ人移送政策について話し合っているが、この話し合いですでに排気ガスによる殺害が話題に上っている<sup>95)</sup>。10月末には東部占領地域省のエアハルト・ヴェッツェルも、労働不能なユダヤ人を「ブラックの補助手段」で殺害することで、銃殺に伴う問題を回避できるとの見解を表明している<sup>96)</sup>。こうした同時並行的な動きは、T4作戦とホロコーストとの密接な関連を再確認させるものといえる。この点に関しては、T4作戦が中止される直前の時期にヒムラーの視察が行われているのも示唆的である<sup>97)</sup>。作戦中止後、関係者の多くが絶滅収容所に配置された事実から、障害者殺害の技術がユダヤ人の大量殺戮に転用されたことは明らかである。

これら2つの転換に対する事件の影響を検討していくと、さらにもう1つ、より根本的な問題が浮かび上がってくる。すなわち、加害者を突き動かした心理的要因の重要性である。視察に立ち会った関係者、およびガストラック開発の関係者の証言を特徴づけていたのは、殺戮任務の苛酷さ、それへの嫌悪感や内面的抵抗の大きさだった。バッハ＝ツェレウスキはヒムラーに処刑の残虐さを訴え、翻意をもとめたと記しているし、ヴォルフも処刑の方法に嫌悪感を抱いたものの、ヒムラーの命令で視察への同行を余儀なくされると強調している<sup>98)</sup>。銃殺部隊の隊員の間には、現場の人間に大きな負担を強いるヒムラーへの反発や犯罪行為に加担することへの葛藤もあった。これらの感情が処刑を視察する彼の姿に投影されることで、気分が悪くなって嘔吐する「軟弱者」の——それじたいはおそらく事実に反する——イメージが生み出されたと考えても、それほど無理はないだろう。いいかえれば、そうした戯画的なイメージによって現場の状況を説明しなければならぬほど、部下たちは深刻な動揺に見舞われていたのだった。この「軟弱」なヒムラー像はたしかに、現実を歪めて理解可能なイメージに還元したも

のに他ならず、戦後の裁判では加害者の責任を相対化する役割を果たした可能性が高い。だがそこには同時に、殺戮への心理的反応が現実の力となって、より効率的な殺害方法の開発を後押ししていったプロセスの痕跡も示されている。

このプロセスの存在を裏付けているのは、ガストラック開発の関係者による証言である。彼らの多くは、開発の目的が「銃殺部隊の精神的負担を軽減すること」にあったと認めている<sup>99)</sup>。「やがて射殺に参加した男たちが精神的損傷を負う事例が増加した。……これと同時に親衛隊帝国指導者がミンスクの大量射殺に参加し、そこで男たちの精神的負担がきわめて大きいことを確認した。彼自身、その際に『軟弱』になったそう。……おそらく帝国指導者の命令の結果として、ネーベは部隊の隊員たちに精神的な負担をかけることなく、人間を大量抹殺するという問題に携わるようになった」<sup>100)</sup>。これは戦後すぐにネーベの部下が行った証言だが、この早い段階でヒムラーの反応とガストラック開発との関連に言及しているのは、バッハ＝ツェレウスキを除けば他には見当たらない。それはもしかすると、「軟弱者」のイメージが新たな殺害方法の開発に携わった人々の間から出てきたこと、バッハ＝ツェレウスキもその開発に深く関与していたことを物語っているのかもしれない。

これらの知見は、歴史研究の方法論としてのオーラルヒストリーの可能性を示している。嘘や偽りを含む語りも、そういう語りを強いる社会的圧力の産物であり、その種の圧力が存在したことの傍証として、事実を追究する歴史学にとって無視できない意義をもっている。口述記録にもとづく歴史研究は、語りのバイアスや多様性を受け止めつつ、その先にある事件の真相に迫ろうとするとき、はじめて有効なものとなるのである。

注

- 1) *Leben eines SS-Generals, Aufbau*, vol. 12, no. 34, 23. 8. 1946, S. 1-2; Raul Hilberg, *Die Vernichtung der europäischen Juden*, Bd. 2, Frankfurt (Main) 1990, S. 347-348 (望田幸男・原田一美・井上茂子訳『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』(上) 柏書房, 1997年, 255-256頁)。
- 2) 日本のホロコースト研究者もこの事件に言及しているが、おおむねヒルバーグの叙述を踏襲するにとどまっており、事件の真相を問い直そうとする姿勢は希薄である。永岑三千輝『ホロコーストの力学』青木書店, 2003年, 159-160頁; 芝健介『武装親衛隊とジェノサイド』有志舎, 2008年, 115頁。ドイツの一般紙

- などではいまだにヒルバークに依拠した一面的なイメージが再生産されている。Beim Massenmord wurde selbst Himmler »käsebleich«, *Die Welt*, 3.8.2016.
- 3) *Der Dienstkalender Heinrich Himmlers 1941/42*, hrsg. von Peter Witte / Michael Wildt / Martina Voigt, Hamburg 1999, S. 195. レーニンハウスはソ連内務人民委員部の本部があった建物で、ヒムラー一行の宿泊先だった。
- 4) 米国ホロコースト記念博物館 (ワシントン DC) 所蔵。https://collections.ushmm.org/search/catalog/irn1000642
- 5) *Dienstkalender Himmlers*, S. 195.
- 6) Leben eines SS-Generals, S. 1-2; Persecution of Jews, National Archives and Records Administration (NARA), RG238, M1270/1/111; Kriegstagebuch von dem Bach-Zelewski, Bundesarchiv Berlin-Lichterfelde (BABL), R20/45b, Bl. 8-9.
- 7) Gerald Reitlinger, *Die Endlösung*, Berlin 1956, S. 234-235.
- 8) Heinz Höhne, *Der Orden unter dem Totenkopf*, München 1967, S. 336 (森亮一訳『髑髏の結社・SSの歴史』(下), 講談社, 2001年, 123-124頁)。
- 9) Jochen von Lang, *Der Adjutant Karl Wolff*, München 1985, S. 170-173; Volker Rieß, *Die Anfänge der Vernichtung »lebensunwerten Lebens« in den Reichsgauen Danzig-Westpreußen und Wartheland 1939/40*, Frankfurt (Main) 1995, S. 273-281.
- 10) Christian Gerlach, *Kalkulierte Morde*, Hamburg 1999, S. 571-574, 637-650.
- 11) Gerlach, *Kalkulierte Morde*, S. 641, 646-647.
- 12) Leben eines SS-Generals, S. 2.
- 13) LG München II, 30.9.1964, 1 Ks 1/64, *Justiz und NS-Verbrechen*, Bd. 20, Amsterdam 1979, S. 434.
- 14) Otto Bradfisch, 2.2.1962, Bundesarchiv Außenstelle Ludwigsburg (BAAL), B162/5032, Bl. 502; Josef Kiermeier, 29.10.1962, BAAL, B162/5033, Bl. 860.
- 15) Karl Wolff, 9.7.1958, BAAL, B162/5029, Bl. 46.
- 16) Karl Wolff, 13.2.1962, BAAL, B162/5027, Bl. 4, 6.
- 17) LG München II, 30.9.1964, S. 437.
- 18) ネーベは1944年7月20日のヒトラー暗殺未遂事件に関与して処刑された。ただし彼がアインザッツグルッペBによるユダヤ人の大量殺戮、爆薬と排気ガスを使った精神障害者の殺害などを指揮したことに変わりはない。Reitlinger, *Endlösung*, S. 209-212; Gerlach, *Kalkulierte Morde*, S. 641.
- 19) Erich von dem Bach-Zelewski, 19.12.1962, BAAL, B162/5033, Bl. 1079.
- 20) LG München II, 30.9.1964, S. 434.
- 21) Wolff, 13.2.1962, Bl. 4,6.
- 22) Karl Wolff, 14.2.1962, BAAL, B162/5027, Bl. 13. この種の証言が減刑目的で行われた可能性にも留意しなければならぬ。
- 23) この矛盾を指摘しているのは1964年の判決である。LG München II, 30.9.1964, S. 436-437.
- 24) Leben eines SS-Generals, S. 2.
- 25) Bach-Zelewski, 19.12.1962, Bl. 1079-1080. バッハ＝ツェレウスキによれば、2名の女性はユダヤ人ではなくロシア人で、バルチザンへの協力者だった。
- 26) Wolff, 9.7.1958, Bl. 46; LG München II, 30.9.1964, S. 437.
- 27) LG München II, 30.9.1964, S. 435. 1964年の判決はこうしたヴォルフの主張を斥けている。
- 28) LG München II, 30.9.1964, S. 436; Otto Klinke, 21.9.1962, BAAL, B162/5032, Bl. 757; Paul Dinter, 3.4.1959, Landesarchiv Berlin (LAB), B Rep. 058 Nr. 7166, Bl. 141-142.
- 29) Paul Dinter, 8.1.1963, BAAL, B162/5033, Bl. 1107.
- 30) Josef Kiermeier, 25.10.1962, BAAL, B162/5033, Bl. 840.
- 31) LG München II, 30.9.1964, S. 436.
- 32) Paul Mahlow, 24.9.1962, BAAL, B162/5032, Bl. 773; Dinter, 8.1.1963, Bl. 1109.
- 33) Otto Bradfisch, 13.6.1958, BAAL, B162/5029, Bl. 17.
- 34) Lang, *Adjutant*, S. 171.
- 35) LG München II, 30.9.1964, S. 438.
- 36) LG München II, 30.9.1964, S. 434; LG München I, 21.7.1961, 22 Ks1/61, *Justiz und NS-Verbrechen*, Bd. 17, S. 673.
- 37) Dinter, 8.1.1963, Bl. 1106.
- 38) Leben eines SS-Generals, S. 2.
- 39) LG München II, 30.9.1964, S. 434; Karl Bohm, 20.9.1962, BAAL, B162/5032, Bl. 741-742. 部隊隊員の証言によれば、1つの溝を警察の部隊が、もう1つの溝を親衛隊・保安部の部隊が担当し、2名の射殺者が1名の犠牲者を狙うという方法だったらしい。Kurt Klaedtke, 26.9.1962, BAAL, B162/5032, Bl. 799-800; Dinter, 8.1.1963, Bl. 1103.
- 40) LG München II, 30.9.1964, S. 434; Walter Thiede, 26.9.1962, BAAL, B162/5032, Bl. 795. 犠牲者は溝の縁に立たされて射殺されたという証言もある。Kurt Klaedtke, 20.3.1959, LAB, B Rep. 058 Nr. 7167, Bl. 71.
- 41) Otto Bradfisch, 27.6.1958, BAAL, B162/5029, Bl. 34-35.
- 42) LG München II, 30.9.1964, S. 434. バッハ＝ツェレウスキによれば「処刑は模範的・軍事的に遂行された」。Bach-Zelewski, 19.12.1962, Bl. 1079.
- 43) Bruno Bäslar, 20.9.1962, BAAL, B162/5032, Bl. 750.
- 44) Kurt Wiczorek, 25.9.1962, BAAL, B162/5032, Bl. 791. プラートフィッシュも任務遂行が部隊隊員にとって「精神的な負担」となっていたと認めている。Bradfisch, 2.2.1962, Bl. 503.
- 45) Ernst Klee / Willi Dreßen / Volker Rieß, »*Schöne Zeiten*«, Frankfurt (Main) 1988, S. 64-70. 1941年7月末には総統本営でアインザッツグルッペンへの任務の苛酷さが問題となっており、ヒムラーの視察が行われたのはそのためだった。Lang, *Adjutant*, S. 170.
- 46) Bohm, 20.9.1962, Bl. 743; Dinter, 8.1.1963, Bl. 1106. ヒムラーが視察の際にゲルマン的理想にふさわしい2

- 名の子どもをドイツへ連れ帰ったという複数の証言もあり、バツハ＝ツェレウスキはこれと混同したのかもしれない。Kiermeier, 29.10.1962, Bl. 861.
- 47) LG München I, 21.7.1961, S. 673; Bradfisch, 27.6.1958, Bl. 35.
- 48) Gerlach, *Kalkulierte Morde*, S. 573, 637-639.
- 49) Gerlach, *Kalkulierte Morde*, S. 640-641; Martin Cüppers, *Wegbereiter der Shoah*, Darmstadt 2005, S. 183-184.
- 50) *Leben eines SS-Generals*, S. 2.
- 51) Rieß, *Anfänge der Vernichtung*, S. 275. ヴォルフは1958年の尋問ではヒムラーの反応に言及しておらず、処刑を見て「吐き気がした」と自分の印象を述べただけだった。Wolff, 9.7.1958, Bl. 47.
- 52) Wolff, 14.2.1962, Bl. 16. ヴォルフは1964年の裁判でも同様の証言を行っている。「ヒムラーは溝の縁に立っていたが、脳の一片が彼のコートにかかったので気分が悪くなった」。LG München II, 30.9.1964, S. 435.
- 53) Bradfisch, 2.2.1962, Bl. 505.
- 54) Bach-Zelewski, 19.12.1962, Bl. 1079-1080.
- 55) Rieß, *Anfänge der Vernichtung*, S. 276-277.
- 56) ヒムラーはそれまでにポーランド戦、西部戦線、バルカン半島で前線視察を行い、とくにブロンベルクでポーランド人の銃殺に立ち会っている。Lang, *Adjutant*, S. 172. ただし占領下ソ連で行われた数多くの銃殺のうち、ヒムラーが視察した数少ない事例の1つだったことはたしかである。LG München I, 21.7.1961, S. 687.
- 57) Lang, *Adjutant*, S. 172.
- 58) Bradfisch, 2.2.1962, Bl. 505. ヒムラーのコートに血がかかったという証言を行っている者は部隊隊員のなかにもいる。Klinke, 21.9.1962, Bl. 760.
- 59) Höhne, *Orden*, S. 335-336 (邦訳, 121-123頁).
- 60) Dinter, 8.1.1963, Bl. 1105. このときブラートフィッシュがヒムラーの指示に従ってディンターに銃を渡し、とどめを刺すよう命じたらしい。Dinter, 3.4.1959, Bl. 141.
- 61) Mahlow, 24.9.1962, Bl. 774; Paul Neumann, 25.9.1962, BAAL, B162/5032, Bl. 786.
- 62) Gerlach, *Kalkulierte Morde*, S. 573-574. ヒムラーの勤務日誌(8月14日)に掲載された視察同行者のリストにも、フレンツともう1名のカメラマンの名が挙げられている。*Dienstkalender Himmlers*, S. 193. フレンツはレニ・リーフェンシュタールの映画の撮影を担当していた人物である。
- 63) Gerlach, *Kalkulierte Morde*, S. 573. フレンツ自身も現場で処刑を目撃したと証言している。Klaus Hesse, »...Gefangenenlager, Exekution, ...Irrenanstalt...«, Hans Georg Hiller von Gaertringen (Hrsg.), *Das Auge des Dritten Reiches*, München 2006, S. 180.
- 64) Gerlach, *Kalkulierte Morde*, S. 573.
- 65) Helmut Krausnick / Hans-Heinrich Wilhelm, *Die Truppe des Weltanschauungskrieges*, Stuttgart 1981, S. 540; *Dienstkalender Himmlers*, S. 269.
- 66) *Leben eines SS-Generals*, S. 2.
- 67) ただしヴォルフは「吐き気がした」ので演説を全部は聞いていないとも主張している。LG München II, 30.9.1964, S. 437. 多くの証言によれば、ヒムラーは車に立って演説したようだ。Bäsler, 20.9.1962, Bl. 749. この演説が処刑の前に行われたという証言もある。Bohm, 20.9.1962, Bl. 743.
- 68) Bach-Zelewski, 19.12.1962, Bl. 1080.
- 69) Wolff, 14.2.1962, Bl. 10-12, 15. ヴォルフはこの証言のなかで、ヒムラーが総統命令に言及したというブラートフィッシュの主張を否定している。
- 70) LG München II, 30.9.1964, S. 437.
- 71) LG München II, 30.9.1964, S. 436; Neumann, 25.9.1962, Bl. 787; Dinter, 8.1.1963, Bl. 1106-7.
- 72) ヒムラーが演説のなかで総統命令に言及したと断言しているのは、ブラートフィッシュだけである。Bradfisch, 2.2.1962, 502. ヒムラーは1943年10月6日にポーゼンで行った演説で、女性と子どもの殺害を子孫による復讐を防止するのに必要な措置として正当化している。*Heinrich Himmler. Geheimreden 1933 bis 1945 und andere Ansprachen*, hrsg. von Bradley F. Smith / Agnes F. Peterson, Frankfurt (Main) 1974, S. 169-170.
- 73) Bäsler, 20.9.1962, Bl. 749; Klinke, 21.9.1962, Bl. 760; Herbert Mentzel, 24.9.1962, BAAL, B162/5032, Bl. 780.
- 74) LG München I, 21.7.1961, S. 693; Bradfisch, 2.2.1962, Bl. 502. ただし総統命令への言及が減刑目的で行われた可能性にも留意する必要がある。1961年の裁判はブラートフィッシュが部下に自分の手で射殺するよう命じていたとの証言にもとづき、彼が積極的に任務を遂行していたと認めている。LG München I, 21.7.1961, S. 694.
- 75) *Leben eines SS-Generals*, S. 2.
- 76) *Leben eines SS-Generals*, S. 2. バツハ＝ツェレウスキによると、彼とヴォルフはこの提案を聞いたとき、患者は実験用モルモットではないとして反対したという。
- 77) *Besichtigung der Irrenanstalt Nowinki*, The National Archives of The Republic of Belarus (NARB), 370-1-141a; N. N. Akimowa, 18.11.1946, Götz Aly (Hrsg.), *Aussonderung und Tod*, Berlin 1985, S. 88-91.
- 78) ガストラック開発の経緯については次の研究を参照。Mathias Beer, *Die Entwicklung der Gaswagen beim Mord an den Juden, Vierteljahreshefte für Zeitgeschichte*, Jg. 35 (1987), Heft 3, S. 403-408; Christopher R. Browning, *The Development and Production of the Nazi Gas Van, Fateful Months*, New York 1985, S. 57-60.
- 79) Albert Widmann, 27.1.1960, Institut für Zeitgeschichte (IfZ), ZS 3120, Bl. 11-15. 実際にもアインザッツグループBは10月初めに、ミンスクで632名、モギリョフで836名の障害者を殺害したと報告している。*Die »Ereignismeldungen UdSSR« 1941*, hrsg. von Klaus-Michael Mallmann / Andrej Angrick / Jürgen Matthäus / Martin Cüppers, Darmstadt 2011, S. 663. ブラートフィッシュも実験がネーベの指示によるものだったと

- 証言している。Otto Bradfisch, 23.6.1958, BAAL, B162/5029, Bl. 28-29.
- 80) Helmut Hoffmann, 27.1.1959, BAAL, B162/5066, Bl. 97.
- 81) Widmann, 27.1.1960, Bl.11-12.
- 82) Albert Widmann, 11.1.1960, IfZ, ZS 3120, Bl. 7-8. 排気ガスの実験は病院の一室を使って行われた。
- 83) Beer, Gaswagen, S. 408-412; Browning, Gas Van, S. 60-63. ただしヒルバークはガストラックが部隊の精神的負担の軽減につながらなかった可能性を指摘している。Hilberg, *Vernichtung*, S. 350 (邦訳, 257頁)。
- 84) Funktelegramme Bach-Zelewski an Wilhelm Koppe, 16. und 18.8.1941, Public Record Office (PRO), HW 16/32.
- 85) Gerlach, *Kalkulierte Morde*, S. 648; Peter Longerich, *Holocaust*, New York 2010, S. 531.
- 86) Wolff, 9.7.1958, Bl. 46; Bradfisch, 2.2.1962, Bl. 502.
- 87) Kiermeier, 29.10.1962, Bl. 860, 863. ヒムラーの勤務日誌に掲載された視察同行者のリストにも、ネーベの代わりにプリュッツマンの名が挙げられている。*Dienstkalender Himmlers*, S. 193.
- 88) Hugo Thomanek, 17.3.1960, BAAL, B162/4338, Bl. 138R; Helmut Ganz, 5.11.1962, BAAL, B162/5033, Bl. 910; Dinter, 3.4.1959, Bl. 141. ディンターがネーベを見たのは夜の酒の席で、処刑の現場にいたかどうかの記憶は曖昧である。
- 89) この点で示唆的なのは、ネーベが実験結果をヒムラーに報告する前、スモレンスクでバツハ＝ツェレウスキと会合をもった可能性が高いことである。Widmann, 11.1.1960, Bl. 7-8; Kriegstagebuch Bach-Zelewski, Bl. 13-14; Gerlach, *Kalkulierte Morde*, S. 649.
- 90) Höhne, *Orden*, S. 333-334 (邦訳, 119頁)。
- 91) LG München II, 30.9.1964, S. 437.
- 92) アーヴィングをホロコースト否認論者と呼んだとして彼から名誉毀損で訴えられた米国の歴史学者デボラ・リップシュタットとペンギン・ブックスも、こうした根拠を挙げて反論、最終的に勝訴している。Irrving v. Penguin Books Limited, Deborah E. Lipstat, 11.4.2000, <http://www.bailii.org/ew/cases/EWHC/QB/2000/115.html> この裁判は映画『否定と肯定』(2016年)の題材にもなった。
- 93) Browning, Gas Van, S. 66.
- 94) Gerlach, *Kalkulierte Morde*, S. 572-573.
- 95) Richard Breitman, *Der Architekt der »Endlösung«*, Paderborn 1996, S. 280.
- 96) Reitlinger, *Endlösung*, S. 145. ここでいう「ブラック」とは、T4作戦を主導した総統官房第2局長ヴィクトア・ブラックのことを指している。
- 97) ガス殺の実験を行ったヴィートマンは総統官房のブラックと技術的問題について話し合ったことを認め、占領下ソ連での精神障害者の殺害を「安楽死作戦の延長」と呼んでいる。Widmann, 11.1.1960, Bl. 8.
- 98) Wolff, 13.2.1962, Bl. 6. 1964年の判決は、ヴォルフのそうした嫌悪感が「内的な変化」やヒムラーとの関係の変化をもたらしたという主張を否定している。LG München II, 30.9.1964, S. 438.
- 99) Bodo Struck, 8.3.1960, BAAL, B162/4338, Bl. 122.
- 100) Andreas von Amburger, 27.12.1945, BAAL, B162/21555, Bl. 101-102.